

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	社会福祉法人能代ふくし会 能代地域生活支援センター (児童発達支援)			
○保護者評価実施期間	令和7年1月14日 ～ 令和7年2月7日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	30人	(回答者数)	18人
○従業者評価実施期間	令和7年1月14日 ～ 令和7年1月31日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7人	(回答者数)	7人
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年2月21日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・施設には、児童発達支援、放課後等デイサービス、就労継続支援B型、共同生活援助、短期入所、相談支援事業所があり、子どもから大人まで切れ目なく連携して支援できる環境であること。	・日頃より他の部署の職員とのコミュニケーションを大切にし、連携しやすいように取り組んでいる。 ・児童発達支援から就学後に放課後等デイサービスを利用する児童も多いため、年齢や利用児童の状況に合わせた一貫性のある支援ができること、一人の利用児を長期的に支援できる。また、利用児も保護者も施設の環境に慣れている為、安心して利用できている。	・長期的な目線で将来に向けた一貫性のある支援を提供していく。 ・施設のお祭りや行事の他に他の事業との交流の機会を検討していく。
2	・感覚は発達の基礎と捉え支援プログラムに感覚運動を取り入れ、総合的にアプローチしていること。	・発達ピラミッドの土台の5つの感覚を大事に、体操、サーキット、ボルスター、ボール遊び等を通して、導入～覚醒～鎮静のサイクルを作り働きかけている。 ・たくさん体を動かしながらことばの育ちや、手先の運動、情緒の安定に繋がられるよう支援している。	・同じ感覚でも、苦手な感覚と受け入れの良い感覚がある。楽しい活動を通して、好きな感覚を分析し、その感覚的欲求を十分に満たしながら、感覚の受け皿を広げていく。 ・遊具・用具も少しずつ増やしながら、感覚運動遊びの幅を広げていく。
3	・関係機関（併用施設）との連携。	・利用児が併用している幼稚園・保育園への見学や事業所への見学を実施し利用児の様子を見たり情報交換を行っている。また、年1回開催している巡回相談時にカンファレンスを実施し情報共有できている。	・子どもの状態に変化があった際には、対面のみならず電話等で情報連携し、スピーディーに支援に活かしていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・医療機関との繋がりが薄いことや、専門職がいないため、正確なアセスメントが出来にくいこと。また、発達状態の確認や助言等をいただく機会が少ないこと。	・利用児が発達外来を受診する際に、事業所での様子を書面にて情報提供し、受診結果は保護者を通じて確認している。 ・市で実施している5歳児親子相談や就学支援委員会等で医療関係者と情報連携しているが、体制が整っていないため不足と感じる。	・自立支援協議会（児童部会）ができ、定期的に会議が開催されると連携しやすくなると思われる。 ・医療療育センターで開催される研修等に出来る限り参加し、センターとの繋がりを持ちながら支援の質の向上に努める。
2			
3			